

牛肉

林美美子

林芙美子小説集

牛肉

改造社版

昭和二十四年十一月二十日 印刷  
昭和二十四年十一月二十五日 發行

牛肉

定價二百三十圓

著者 林 芙 美 子

發行者 平 田 貫 一 郎  
東京都中央區京橋一ノ三

印刷者 井 關 好 彦  
東京都千 田區神田錦町三ノ一

發 兌 改 造 社

東京都中央區京橋一ノ三  
振替東京八四〇二  
電話京橋(56)五一六二九〇

印刷所 東京都千代田區神田錦町三ノ一 大同印刷株式會社  
製本所 東京都港區芝南佐久間町二ノ一 株式會社小高製本所

目次

牛	肉	一
下 <sup>ダ</sup> 町 <sup>チヨウ</sup>	売	一
道	づ	三
三	つ	八
退	屈	一〇
う	な	一三
ラ	・	一五
羽	柴	一八
ト	ラ	二一
骨	ン	二四
椰子	ク	二七
の	實	二七

# 牛 肉

——今日わが目をなくさめるあの若草が  
明日はまたわが身に生えて誰が見る？——

(ルバイヤートより)



突然、満喜江から鍵を下さいと電話がかゝつて來た。今日これから、荷物を持つてすも行きたいと云ふので、佐々木は吃驚して、どうした事なのだと言いた。「どうつて事もないけど、マッ、ケンジイさんのところ、出てしまつたのよ。私にはどうしても勤まりさうもないんですもの……これから使ひのものをやりますから、そのひとに鍵を渡して頂戴。くはしい事は、佐々木さんが戻つてらつしてお話をしますわ……」と云ふ事だつたので、佐々木も兎に角、嬉しくもあつたし、さうした事件に、興味のない事もなかつたので、満喜江の使ひのもの來るのを心待ちにしてゐた。夕方使ひのものが來た。受付へ行つてみると、行商にでも來るやうな、もんぺ姿の老けた女が、満喜江の小さい金ぶちの名刺を持つて立つてゐた。佐々木は名刺を受け取つて、ポケットから鍵を出してその女に渡した。丁度、夜勤の日だつたのだけれども、佐々木は會社の食堂で辨當を濟ませて、同僚の岡崎に夜勤を代つて貰つた。漢口陥落の翌日だつたので、街は何となくざわ

めき、前景氣のいゝ活氣が何處にも満ち溢れてゐた。會社を出て、東京驛へ來ると、驛前の地下工事をしてゐる赤いランプのあたりに、出征兵士を送る群が幾組か萬歳を三唱してゐた。佐々木はまるで他人事のやうに、かうした眺めにも何の興味もなく、省線のホームへ出ると、滿喜江の華がな引越しを空想して、心の何處かに、うづうづとするやうな嬉しさがこみあげてゐた。

四谷で降りて、麴町消防署の建物の横を曲ると、何處がらともなく鮭を焼く匂ひがして來た。アパートの窓を見ると、ちやんと自分の窓に燈火が射してゐて、引き絞つたカーテンの針金に、大判のタオルのやうなものがかけてある。佐々木は急いでアパートの金文字入りの扉を押して二階へ上つて行つた。何時も、こんな早い時間に戻つた事がないので、佐々木はかへつて新鮮なすがすがしいものを感じて、自分の部屋の前へ行つた。耳をかたむけると、炊事場で水の音がしてゐる。光つたノブをまはすと、狭いたゞきの上に、スエードの茶革のハイヒールが一足ぬいであつて、部屋の中に、金具の立派な大きいトランクが一つ持ちこんであつた。「マキイ！」佐々木がはずんだ聲で呼んだ。炊事場のカーテンから、「アロー」と云ふ聲がして、ピンクのパンツ一つの滿喜江がすんなりした裸で出て來た。意外なところで意外なものを見るやうな氣がして、佐々木は暫くそこへつゝ立つてゐた。「私、逃げて來ちやつたのよ。あんたの都合も何も聞かない



でごめんなさい……」満喜江は少しも氣の毒な顔つきではなく、素肌にフランネルの棒網の部屋着を引っかけると、紅革のケースから、銀の唐草模様にはめこまれた鏡を出して化粧を始めてゐる。「逃げて來たつて、まつすぐにどうへ來たの?」「うゝん、辰ちやんのところへ十日ほど前からゐたよ。——辰ちやんと喧嘩したから、佐々木さんを思ひ出して來たの……」「辰ちやんは何處にゐるんだい?」「小田急の柿生つてところにあるんだけど、此の頃、あの一と働いてゐないもんで、また、横濱へ歸らうかつて云つてゐたわ……」「マッケンジイさんのところは、何かしくじりでもしたのかい?」「しくじつたりはしないけど、私、とても、あんな生活には疲れちやつたのよ。——膝小僧を出して、お茶漬けを食べたいつて氣持なの……判る?」佐々木は満喜江のトランクに腰をかけて、櫻を一本出して啜へた。そして、満喜江にもすゝめると、満喜江は急いで、大きいハンドバッグから、キリアジの紅色の箱を出して、佐々木の啜へてゐる煙草をとりかへてやつた。「これもマッケンジイさんのかい?」「私の好きな煙草なのよ。——ねえ、時におなかが空いたんだけど、何か買つて來てよ。——パンにぼつてりとバターとチーズをつけて、リプトンの紅茶でいゝわ」佐々木はメモの紙を引き破つて、パン一斤。雪印バター半ポンド。クラフトチーズ半ポンド。開新堂のパイとシュークリームを混ぜて半ダースと書いて、管理人の女

中にこれだけのものを買つて来てくれるやうにと頼んだ。満喜江は佐々木のベッドに寝轉び、暫く煙草の煙を見てゐたが、心のなかでは——いろいろな事を考へてゐるらしく、くはしい事を一切話すと云つておきながら、案外頑固に黙りこんでゐた。クリームで拭いただけの顔が酔つたやうに光つてゐた。大きい唇に牡丹色の紅を塗つてゐるので、派手な部屋着によく似合つてゐた。

「當分、こゝにゐてもいいよ？」「あゝ、いゝよ」「私、自炊なんて出来ないけど、此のアパートに食堂つてないかしら？」「美味しいものは出来ないが、食堂はあるさ。近所には肉を食はせる三河屋もあるし、鰻の美味しいのは古い店でさぬき屋もあるしね。君の好きなやうにして暮すさ……」

「あら、私は、いまのところ、とても貧乏になつちやつてるのよ。指輪や腕輪を賣つて、當分のい、ぎに當てるつもりなの。あんまりぜいたくは出来ない事よ……」云はれてみると、案外満喜江の持ちものが簡単な様子だつた。暫くして、註文のものが來たので、佐々木は炊事場で、ガスに瀬戸引きのやかんをかけて、パンを切つた。満喜江はベッドに寝たまゝで、炊事場の佐々木に話しかけてゐる。「私ね、やつぱり貧乏人の子だつて思ふのよ。ぜいたくつてものが案外つまらないんだつて判つたわ。まだ、マキイは若いせぬかしらとも思つたんだけど、さうでもないのね。——ね、あの事で、肌がしつくり合はないつて事もあるけど、へとへとに疲れちやつて、佐

★木さんみたいにしつくりしないの。本當なの……。過ぎたるは及ばざるが如しつてね。マキイはおしまひには眠つちまふんですもの。——そりやアね、私にだつて理想化したものは何かある筈なんだけど、うまアく説明が出来ないけれど、ちつともきあひがあはないのがいけないんだわ……。折角のところ、トレ・ジョリイではうまくゆかないわよ。モンセリイ・マキイつたつて、うまアくピントがあはないしね。眠つた軀を團子のやうにこねられたつてどうにもならないでせう……。時々、氷の水を飲まされるんだけど、眠い時はもう駄目。外出もめつたにしないで、い暮しをしたつて何もならないつて判つたわ。——硝子玉の指輪か何かはめちやつてさ、しわくちやの拾圓札を大切にしまつてる頃の方がマキイは活氣があつたわよ。——もう一度、メエゾン・ビオレに戻つちやはうかとも考へたんだけど、出た次手に、面白い事もしてみいよと思つて、辰ちやんところへ行つたんだけど……。辰ちやんとこちやア七人家内で、話のほかのさんたんたる生活でしょ？ 私のもの、黙つて持ち出しては賣り拂つちまつたんですもの、我慢にもゐられやしないわね……。」「いまに、こゝだつて君の氣にはいらなくなるだらう……。こゝだつてさんたんたるもんだぜ……。」「ええ、でも、佐々木さんはいよ人だしさ、私がちやんと、あのこと教へてあげたんだもの、なつかしいわ。——當分ゐてもいよでせう？ マキイは、いま、とても淋しくて

仕方がないのよ。十日も獨りであると、やつぱり、人肌が戀しいんだし、私、駄目になつてゐるのね。軀が、もう、そんな風に出來ちやつてるのね。——先きの事なんか少しも考へないのよ。

佐々木さんが奥さんでもゐるんだつたら、私、また本牧へ歸るつもりだつた……。ほら、あんなと何時も眼が覺めると、窓の下で、シャクシャクつて、あ、あ、あを掴る音がしてたでしょ？ ああ、あの音がなつかしくてたまらないわ。——初めての晩、稲光りがしてさ、ものすごい嵐だつたの覺えてる？」「覺えてるよ」「さう……覺えててね。そんな事がマキイは嬉しいのよ。——あんな、あのころ、何も知らなかつたわね……。ぼおつとしてたちやない？ 上手なお金のかゝらない遊び方を教へてあげませうつて云つたら、あんな、震へながら、私に、財布を出したぢやないの……」佐々木は柔いパンを不器用に切つて、紅茶の支度をして満喜江のそばへ持つて行つた。「メルスイ・ムッシュウ……。佐々木さんは何時までもすれつからしにならない人ね。私、早く、ここへ來ればよかつたわ……」「まつすぐ來てくれれば、もつと嬉しいね……」「さう、本當にさう思つてくれるの？」パンにバターとチーズを挟んでやると、満喜江はきやしやな指でつまんで、紅のついた唇を突きあげるやうにして頬張つた。満喜江は枕に片肘ついてパンを食べながら、佐々木の顔を見てゐた。二人の間に、一年以上の歳月があつたせゐか、佐々木の風貌が少しばかり

變化してゐて、もう、あの頃のやうな初々しいところがない。満喜江はふつと眞面目な眼つきで、ちいつと佐々木の顔をみつめる。この人も變つたと思つた。マッケンジイの白い粉を噴いたやうな肌を見つけてゐた眼には、油光りのした、額ぎはの薄汚れた肌色も寒々しいのだ。たつた一年あまりの間に、若い男の風貌と云ふものは變るものなのかしら……。もう、五六年も經つたら、どんな風に變化するだらうと、満喜江は佐々木の顔に、そつと歲月の年輪を置いてみる。「ねえ、マキイは汚なくなつて?」「とても綺麗だよ。以前も綺麗だつたが、いまはもつと凄く美人だ……」「本當かしら……あれから一年たつてゐるのよ」「ぜいたくな暮しをしてたからだらうけど、肉づきががっちりして、肌がすべすべしてゐるね」「本當かしら……」枕から肘をはづして、満喜江は自分の腕をみつめた。オパールをつゞつた腕輪が手首からずれて光つた。佐々木は熱い紅茶を吹きながら、満喜江の赤らんだ腕を見つめた。部屋着の裾を割つて、形のいゝ脚が毛布の上に投げ出されてゐる。「あれから、佐々木さんにもいゝ人あつて?」「笑ひながら満喜江が訊いた。「あつたにはあつたさ。だけど別れちやつた。どうもしつくりしなくてね……」「どつちが悪いの?」「さアどつちもどつちだらう……」「親切にしてあげなかつたんぢやない? 女のひとつて、それが問題だわ。佐々木さんにはもとでがかゝつてゐるんだけど、變ね……」指についたバターを

なめながら、満喜江がぼつんと云つた。——佐々木は半年程前に別れた房子の瘦せた軀つきを思ひ出してゐる。新潟の五泉の女で、神田の洋品店の賣子だつたのを、佐々木はふつとみそめて自分の下宿に連れて來たのだけれども、始めの自から、それこそうまくゆかなくて、二月で二人の生活は解消してしまひ、佐々木はこの彌生アパートへ越して來た。新潟へ戻つて役所へ勤めてゐるらしいと云ふ風評を聞いたきり、二人の間には別れて以來音信はなかつた。

満喜江はパンを食べるだけ食べると、また煙草に火をつけて、ばつばつと口から煙を吐き捨てながら、何とない後悔に似た氣持ちを味つてゐた。二度と昔のひとに逢ふなんて愚はしない事だと思つてゐた。紺の背廣に、白い亢褌衣、赤縞のネクタイと云つたあの服裝の佐々木のおもかげに惚れてゐたのかもしれないと思つた。手入れのゆきとゞいた襟足の青々したところも好きであつた。いま、眼の前に見る佐々木はブラシもあてない古びた杉あやの背廣に、疲れた絹編みのネクタイをしてゐた。襟足も馬鹿に汚い。うつすりと鼻下にひげを生やしかけてゐるのも油臭い感じだつた。生活の垢がつきかけてゐる男には、満喜江は何の魅力も持たないのだ。たつた一年でこんなにも男は變つてしまふものなのかと不思議である。張りぼての西洋式なアパートで、板の上に薄べりを敷き、病院の入院室に行けば見られる、あの鐵製の白塗りの小さいベッドがある

きり。がつしりしたマッケンジイの住宅をみつけた満喜江の目には、中學校の寄宿舎にでもゐるやうな氣がした。かうしたアパートも、場所がいゝので案外高いのかも知れない。——夜更けて、二人はきゆうくつな恰好でベッドにはいつた。野良猫を抱いて寝てゐるやうな氣がして、満喜江は哀しい氣がしてゐた。長い間蒲團も干さないせゐか魚臭い。満喜江は大きな湯上りタオルを取つて蒲團の襟にあてた。あの、特殊なミルク臭さ、巨きい軀の老マッケンジイのおもかげが突然臉に浮ぶ。どうして落ちついてゐなかつたのだらう……。そのくせ少しも以前の生活へ戻りたい慾はなかつた。時々省線の音が風のかげんで近々と聞こえて、アパートのなかも靜かになつた。燈火に紫の風呂敷をかけて、二人は顔を寄せあつてゐた。満喜江は眼を閉ぢた。かんねんしてしまつて貴方まかせですと云つた様子だつた。佐々木は昔の記憶を呼びかへすやうな氣がまへで、靜かに満喜江の耳に唇を持つて行つた。だが、満喜江は、さうした道順はどうでもよかつたのだ。早く役目を濟ましてぐつすり眠りたい慾望しかない。耳に熱い息がかゝり、髪のに荒い指がからまつたとところで、何の反應も動いては來ない。心が冷えきつてゐた。あれから少しも進歩してゐない男のしぐさが、古ぼけて見える。

一週間程、満喜江は、アパートにこもつたまゝじだらくな生活をしてゐたが、そのうち、満喜江はちよくちよく化粧をして出歩くやうになり、佐々木の留守にインド人を連れ込んで来るやうになつてゐた。アパートでも風評になり、佐々木もさうした風評を耳にして不快ではあつたけれども、別に一錢も満喜江にふたんをかけられた事のない身であつてみれば、満喜江に向つて不足がましい事を云ふわけにもいかなかつた。——満喜江は何時の間にか腕輪も指輪も賣つた様子だつた。時々、満喜江の郷里の千葉から、満喜江の弟がやつて來ては金を持つて歸る様子も、佐々木は管理人の女中から聞いた。——一ヶ月の間に、満喜江はすっかりめぼしいものは賣り盡してしまつてゐた。インド人との間も何となく切れてしまつたのか、満喜江は十二月にはいつた或る日、着のみ着のまゝで出て行つてしまつたきり、佐々木のアパートには戻らなかつた。四五日は、それでも戻つて來ると佐々木は心待ちにしてゐた。クリスマスが近づいても戻つては來なかつたが、銀座の洋服屋と、近所の西洋洗濯屋とから佐々木のアパートへ金を取りに來たものがあつて、佐々木は満喜江の借金を知り、ボーナスをすっかりその拂ひにはたいしてしまつた。

佐々木が始めて満喜江に逢つたのは、R新聞の記者になりたてで、横濱の支局勤めの時であつ



た。本牧での遊蕩をまだ知らないと言ふ佐々木を案内して、同僚は出かけて行つた。有力な或る人の紹介があつたので、メエゾン・ピオレと云ふやかたに行き、こゝで賣れツ子のマキイに佐々木は逢つた。木更津近くの漁村の生れだと云ふマキイは體格もよく、パンのやうな小麦色の肌が佐々木の眼を惹いた。マキイと一夜をとにもすると云ふ事は、ピオレのママさんの特別のはからひでもあつたし、童貞だと云ふ佐々木のかどでを祝しての世馴れた同僚の心づかひでもあつたのだらう。

佐々木はマキイを識つてから、ほとんど毎日のやうに本牧に出掛けて行き、マキイのベッドのやうになつてゐた。マキイが二十一、佐々木が二十六歳であつた。——佐々木は家が大船にあり、その頃は自分の収入は自分だけで使つてもいゝ親がかりの身軽さから、かなり無理な借金もつくつてはピオレに派手に通つてゐた。

マキイに逢つて一年位もした時であつたらうか、マキイはマッケンジイと云ふ、古くから日本にゐる富有な貿易商人にみそめられて身受けされて行つた。マッケンジイさんは、佛蘭西生れのエストニヤ人である。マッケンジイ家には、メエゾン・ピオレからも二人ほどかつて身受けされて行つた女があつたけれども、どの女も三月とは續かないで家出をしたと云ふ風評があつたので、